

# エンカウンター (ENCOUNTER)

第 2 5 3 号

2023 年 5 月 1 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「コリント人への第 2 の手紙講解説教」より (9)

## ほんものになるには時間がかかる

[パウロは、コリント後書第 10 章 15 節で] あなたがたの中に私が述べる信仰が成長するように願うと言っております。聖書の福音の信仰というものは、我々にはなかなか育ちません。我々の経験を通じて聖書の真理が分かって来ますが、我々は、聖書の教えよりも、人間に魅力のある教えや道徳など、この世のこのの方が分かりやすい。従って、そちらになびき易いからであります。私は、聖書の真理が分かるのに 20 年はかかると言っていますが、我々にとっては、今直ぐわかる教えの方が魅力的であります。キリスト教に魅力がないことは、長くかかるということでもあります。しかし何でも、本物になるには時間がかかるものです。語学でも最低 10 年を要します。

信仰はなかなか育ちません。特に、頭の良い人ほど育たないようであります。

理屈は言いますが、じっと辛抱して、信仰を人生において鍛える、という謙虚さがありません。「咲く花は多し、されど実となるは少なし、実となるは多し、されど熟するは少なし」という原理は信仰でも同じであると、内村先生はおっしゃいました。パウロは、信仰は力である、と言いました。力のないのは福音が分かっていない証拠であります。

## 復活の生命が臨めば、力が出る

キリストの究極の救いの根源は「復活」にあります。永遠不滅の復活体となることでもあります。ロマ書8章の「信、望、愛」にはこのことが書いてあります。ロマ書15章13節、ロマ書の結論は、汝らにこの復活の望みを持たせることにあります。

この生命が臨まない限りは、人間に力が出て来ません。

人間には力が問題です。理想とか、道徳の教訓とか、そういうものはあった方がよいが、あってもそれを行なう力がなければナンセンスです。その力は、簡単に、直ぐには出て来ません。相当時間がかかります。聖霊が降臨して分かります。聖霊降臨日の意味がそこにあります。

## 霊的理解は、万人異なる

パウロはここ〔コリント後書第10章5, 6節〕で、君たちを教えている大先生と比べて劣らないことを自慢しています。しかし、なるほど、私が彼らに劣っているところもある、と。パウロはあまり雄弁ではなかったようです。パウロは彼らよりも弁舌が劣っていることを認めています。しかし、救いの知識については分かっている。そして、その知識は、私の生活をもって証明して、君たちに見せている。それが分からないのか、と言っているのであります。ペテロもヨハネも、皆この救いについて語っておりますが、最もそれを明瞭に説明したのはパウロです。パウロだけがこの救いの意義、即ち、何故イエス・キリストを信じたら救われるのかを、ロマ書において明々白々に説明しました。この大伝道者が、私は救いの知識について少しく知っていると誇っても、それはパウロの当然の誇りであります。

本日の箇所の大意を終わります。我々信者も、キリストに対する理解は非常に違います。これほど違うものはないと思います。この霊的理解というものは、万人、その程度はすべて違う。そうですから、自分は相当分かっていると思うことは禁物です。本教会でも、牧師がそのようなことを言いますから、分かったようなことを言う信者もいます。それは大間違いです。どの程度理解しているかは、神のみが知り給うことであります。これは、一生涯にわたって学ぶべき問題であります。

## 他人の信仰を批判するな

私は偽教師は悪くないと思います。責めるべきではなく、人間としては当然のことをやっているに過ぎません。最初は、贖いを否定し、復活を否定し、再臨を否定する。これはあたり前の事であります。ヨハネ、ペテロでも、イエスの復活を聞いた時には、愚かな話 (an idle tale) として信じなかった。復活ということは、普通の人々の理性をもってすれば愚かな事に見えるのは当然であります。初めは信じなくともよろしい。無理です。神から聖霊が下れば分かることです。「信じる事」ではなく「信じさせられる事」であります。それが分かっていないから、彼には信仰がないとか、あるとか、人を批判します。絶対に、他人の信仰を批判してはなりません。

偽教師と言われる、パウロに劣った先生は、悪くはありません。パウロを非難したことが悪い。自分が分かっていないのに、分かっている先生を非難したところに彼らの問題があります。諸君も、信仰の先輩を非難してはいけません。また、後輩を非難してもいけません。自分の分を守ったらそれでよい。私も、この教会以外では福音を宣べません。ここに来てくれる人だけに福音を宣べています。私は、君たちの許しを得てこのようなことを言っているのであります。キリスト教を道徳と解してもよろしい。キリスト教は十戒の戒律を守ることから始まっています。しかし、人を非難してはいけません。それらは福音を理解する上の順路であります。

## 意見の違う人を尊敬せよ

偽教師に対する方法は、彼らに対して、「自らが真実の福音を知る」ことでもあります。偽物を見抜くためには、本物を知ることでもあります。例えば、純金であるか偽の混ざり物であるかを見分けるためには、まず純金を十分見ておく必要があると言われていています。本物を知るためには、どうしても、聖書全体に書かれている主張を知ることです。我々がそれを好むと好まざるとにかかわらず、それが本物であります。我々は自分の考えを捨てて、キリストの言われる赤子のようになって、謙遜に聖書の真理を学ぶ必要があります。

第2の方法として、「意見の違う人を尊敬せよ」ということでもあります。聖書の信じ方は皆違います。

何十年も親しくしてきた石館兄弟と私でも、聖書の理解に違いがあります。顔が違う如く、皆違います。他人の信仰を批判してはいけません。尊敬する必要があります。同じくキリストを求めている兄弟姉妹として尊敬すべきであります。

## 異なる教えの先生を敬え

私が思うに、偽教師はこの2つとも欠けている。というのは、偽教師は謙遜でない。真理を学ぼうとする態度がない。彼らは、パウロの福音は、キリストによる自由などと言って異教徒、異邦人を不道徳にさせる危険性のある福音である、神に反するものである、と断定しました。自分でパウロの教えを一遍研究して見ようという謙遜がありません。自分が偉い、自分はエルサレムから選ばれたエキスパートであると自負していました。これは偽教師のみならず、我々信者、徳に牧師や古い信者にとって注意すべき問題であります。自分が謙遜に真理を学ぼうという精神が無いと、何十年教会に来ても進歩しません。

第2の他人の異なる意見を尊重する精神にも欠けています。法然上人の「和語燈録」の中に「異なる教えの先生を敬え」と書いてあります。私は、特にキリスト教においては、「異なる意見の信者を敬え」ということが重要であると思います。

## パウロの福音を背負いたい

パウロはここで、自分の嫌いなことを何故するか。それは、いやなことをしてまでも、君達が本当に福音を理解して、高められるようにと願っているためである。どんなことをしても、コリント教会の人々に生命の福音を宣べ伝えたい、という愛の心から来ています。パウロの愛には量るべからざるものがあります。我々に愛がないのは、復活の望みがないからであります。この望みがあれば、この世の50年、100年は、人のために尽くすことが可能となります。この意味において、私もまた、パウロの福音を背負いたい。

## 偉大さは隠れている

ここでパウロは誇ってはおりますけれども。自分のして来た大きなことを誠に簡単に書いています。イエス・キリストは半日十字架におかかりになられました。パウロは数 10 年間にわたり十字架にかかったような苦しみでした。この文章を読むと、簡単で一見興味を引かないような内容に見えますが、パウロの苦しみは、我々の想像以上のものでした。ルカ伝や使徒行伝にも、パウロの苦しみに関する記載がありますが、それはほんの一部分にすぎません。使徒パウロの一生涯の出来事をパウロ自ら書いた箇所はこの記事だけであります。誠にその内容は簡単に述べられておりますますが、もしもこの偽預言者に対する発言がなかったならば、パウロの生涯はキリスト教史において分からないままに終わったかと思われれます。大抵、偉い人とはそういうものであります。よいところは我々には少しも分かっておりません。偉大さはみんな隠れています。見えている者は、大体において偽物か、たいしたものではありません。この〔コリント後書 11 章〕 22 節からの誇りの内容は、パウロが仕方なく述べた箇所ですが、パウロの生涯がいかなる生涯であったかを瞥見する一つの窓口として重要な記事であります。

## パウロの苦難

〔コリント後書 11 章〕 24 節に、「40 に一つ足りない鞭」とありますが、これは死刑に等しいような残酷な罰であったようです。……この 1 節だけでも、パウロの伝道生涯の苦しみが分かります。律法、道徳に無関係に、キリストを信じて救われる、と説いたため、律法を順守していたユダヤ人からこんな迫害を受けたのであります。伝道者が真剣に、自分の首をかけて福音を宣べ伝えてきたことがよく分かります。福音を少しく理解できたものは、感謝する義務があります。特にユダヤ人がパウロを執拗に迫害しました。ちょうど内村先生をむしる教会の人が迫害したようなものです。

25 節、26 節。これが外から迫って来るパウロの苦難です。我々は太平の世に生まれ、クリスチャンとして看板をかかげ、キリストのために苦しむことなく、むしろ未信者よりも楽な生活を送っています。そして、もし、未信者を見くだしているという傾向があるとしたら、我々は猛省する必要があります。彼の生涯は、まさに十字架にかかっているような生涯でした。しかしパウロは、ロマ書 8 章において、これらの外からの苦しみに勝ち得て余りある、と言っております。……こんなに沢山自慢することがあるのに、パウロは言いませんでした。もし偽預言者がパウロを責めなかったら、パウロはこれについて触れなかったであろうと思います。そういうことだけでも、パウロの真似をしたいと思います。もし善行のようなものをしていたら、それは完全に沈黙です。

## 第1の感想 弱きに神が働く福音

偽預言者たちは、エルサレムからの紹介状を持ち、聖書に関する知識が十分にあり、誠に堂々としておりました。ところが、一方パウロは、迫害され、1 浮浪人の如く、頼るべく何らの権力無くして、頼りになるのはただ神、キリストのみであり、それが彼の唯一の力でした。偽預言者は自分の学問や雄弁さなど、目に見えるこの世の肉のものを誇りとしていましたが、これに対するパウロの誇りは弱さでした。この弱きに神が働くところの福音を誇っていました。この偽預言者とパウロとの差異は、まさしく未信者と信者との差異であります。我々信者は、思いをここに致す必要があります。

## 我々は如何に謙遜であるか

聖書で、使徒パウロの偉大さを書いたところはここ〔コリント前書第 11 章 6－33 節〕だけです。パウロが困難を征服した、あるいは、天からの啓示を受けたということは、他では言うておりません。我々人間は大きなことを言いたいものですが、大きなことについては聖書は沈黙です。使徒行伝および他の書簡では、福音がどういうもので、どのように伝わったかということだけ説明しています。モーク先生は、教会に新しい礼拝堂が建てられた時に、「神はセメントのうちには住み給わない」と言われました。たとえ、大伽藍を建てたり、多くの人を集めても、そこに福音がなかったら駄目です。もしここに 20 人が集まって、その中の一人一人に福音が分かって、一騎当千になれば、20 人の信者は 2 万人に相当します。たとえ 2 万人集まっても、福音が分からなければ、10 年か 20 年で消えてしまいます。大きな礼拝堂が欲しければ、創価学会にならい給え。本日のレッスンでは、肉のことと、霊のこととの差異が実にはっきり出ております。

### 第 3 の感想

我々はいかに謙遜であるか、その程度によって、それだけ信仰が分かっていることとなります。謙遜とは自分を低めることでもあります。自分に価値があると思わないことでもあります。